研究会　コレクティブハウジングの挑戦

（質疑）

居住者組合とNPOの関係は？

田嶋　労働者協同組合センター事業団の田嶋と申します。今、センター事業団は生活科学運営からはライフハウス・シニアハウスの委託を受けたり、清掃の業務を始めています。NPO法人としてコレクティブハウスをコーディネートされているということですが、事業主とはどういった形の契約を結んでおられるのか、それから入居条件として「居住者組合の会員となる」ということですが、居住者組合とNPOとの関係は、どのようになっているのでしょうか？

宮前　まず事業主との関係は、最初は建物ができる前ですから企画段階から参加したのですが、実際は入居者コーディネートということで非常に不本意ながら(笑)結局委託業務ではなく、成功報酬型でして、入居者の敷金4か月分の内2か月分をこちらに最終的にこちらにコーディネート・フィーとして払う形になってしまいました。こちらとしては委託業務と考えていたのですが、事業主側にそういった委託形式がないといわれてしまい、今回に限りこのような形で仕事を受けました。

今はまだ住居が満室になっていませんので、満室になるまではこの状態で行き、その後は入退居の際にもコーディネートが必要になってくるというのと、コレクティブハウスの運営についても事業主だけでは難しいということで、今後は管理委託に近い形で年間契約で契約していただいて、その間に様子も見ながら支援をするということで、話し合いをしているところです。

コレクティブハウスができるまでの間は、コーディネート・フィーがどのような形で出るか微妙だったのと、私たちもどんな仕事が発生するかを読みきれなかったところがありました。やはり社会的責任が生じるので、普通の「活動グループ」ではちょっとハウジングは受けられないんじゃないか、ということでこのプロジェクトのためにNPOになったようなところがります。

田嶋　NPOコレクティブハウジング社は「かんかん森」のためにつくったのですか？

宮前　その前には「ALCC（Alternative Living Challenge City）」というグループでコレクティブハウスを研究・啓発する活動をしていたのですけれども、具体的なハウジングになった時点で法人にしないといけないと思ってつくりました。

今回、事業主が出してくれたのは居住者コーディネート・フィーで、結局設計管理フィーは本当にほとんど出なかったんです。設計事務所が入っていたのですが、設計事務所もこういうものをつくるのが初めてで、全

く経験がない。私たちはちょっとしたコーディネートをすればいいかと思って最初は助言をしていたんですけれども、結局彼らは「どうしていいかよくわからないのでやってくれ」という形になりまして、最終的に設計管理をするところまでやらないと、キチッとしたものができないということになって、そこはボランティアでやってしまいました(笑)。私も建築士なんですけれども、グループの中に設計を仕事にしているものが「居てしまった」ということもいけないところかも知れないのですが。ですから、そういう意味で本当は設計者へのコーディネート、事業者へのコーディネート、居住者へのコーディネートという三方向へのコーディネートをしたので三方向からお金をいただかないとNPOが成り立たないだろうということを、今後は皆さんにお話していくことになると思います。

今までは「何をするNPOか」も皆さんにわからなかったと思うし、それが必要かどうかも理解していただかなければ私たちを使っていただけないので、本当にこれからというところなのかな、と思います。

居住者組合と私たちの関係は、居住者は全員NPOの個人会員になっています。なおかつ、入居後はかんかん森居住者組合「森の風」に団体会員になってもらいました。年会費という形で個人3,000円／年、団体30,000円／年を払っていただいています。入居者になるには、居住者組合とNPOのどちらの会員にもならなければならないということを決めています。

コレクティブ＝食事の共同化？

杉本　船橋の高根台団地の住人でもある労協船橋の杉本です。今、高根台団地は建て替えが始まっているところで、コレクティブという住まい方にかなり興味を持っています。まず「住まい方＝どういう形で住み続けるか」が皆さんの中心的な課題だと思っているのですが、共同で運営するのはやはり食事が一番大きな部分なのでしょうか？

宮前　それも「日本でどうか」というのは、結論がまだ出ていないのでは、と私たちは思っています。ただ、「食」の共同化というのはすごくいいんですよね。作業のバリエーションがものすごくあるんです。本当にスプーンを並べるくらいの能力から、難しい味付けや重たいものを操作するということまで、いろいろな人が参加できる。かんかん森の「森の風」も15歳（高校生）から参加ということになっていて、クッキングメンバーに入っています。それから、「食べる」という楽しい結果につながる作業だから、やってすごく充実感があるというか、そういう意味では非常に共同するのに「いい作業」なんです。食べることが大体楽しいということもあるのだけれども。

そういう意味では食の共同化というのはすごく可能性が高いと思いますが、高齢期を迎えてずっとやり続けられるか、という話にもなりますよね。そうすると「サービスタイプ」もあるだろうと思うんですね。その時にもコックさんを雇うか、ワーカーズみたいな方たちに来てもらうか、いろいろな方法があります。そういうことをあまり固定して「絶対に住民がやるんです」ということにする必要はないんじゃないか、と思っています。調理を何らかの形で一緒にすることはとても楽しいことで、豊かさの一部になると思うのでぜひやったほうがいいと思いますが、それを「住まい手が必ず担わなければならない」といったことはあくまでも住まい手の状況で判断する。

かんかん森もコモンミール（共同の調理・後片付け）を今は週3日と決めていますが、週3日なのか5日なのかは、住まい手がまたこれから決めていくことだと思います。

スウェーデンでは休日は家族の時間を非常に大切にするので、コモンミールは平日なんですね。ところがかんかん森は、土曜も日曜もクッキングを行うチームがあるんです。というのは働き方からいって平日は帰ってこられないというメンバーもいて、いつも「平日は私はできません」とやっていると、うしろめたい気持ちになるじゃないですか。それはイヤなので「土・日もやらせてよ」という意見があって、「日曜ならゆっくり参加できる」というのはやはり日本だなと本当に思うんですけれども、それもアリだと思うんです。だから、そこに住まう人たちがやりやすい、ということがすごく大事で、その方向を探っていくということ＝日本型をつくっていくことは、これからなんだろうなと思っています。

杉本　コーディネーターの役割について三方向と言われましたが、居住者に対しての部分についてもう少しお聞きしたいのですが。

宮前　やはりこういう暮らし方って誰もやったことがないので、まずイメージが湧かないですよね。寮みたいなものとか昔の長屋みたいなものとか、経験したことのあるものしか思い浮かばないので、そのあたりを空間と一緒に、自分たちが自主管理するということを考えてもらいながら、イメージを高めていく。

最初にやったことは、空間の設計をやっている段階で、「どういうスペースが欲しいか？」という話し合いをしました。ここでは「お茶室が欲しい」とか「オーディオルームが欲しい」とか一杯出ていたんですね。それをやるとどんどん家賃負担が上がる（現在は家賃の13%を共有部分の負担額としている）ということで、その辺の具体的なせめぎあいをしていく中で、諦めたものもあります。ここはゲストルームを諦めたんですけれども。そういうやり取りをしながら「自分たちがここでどんなことをしていきたいか」を一緒になってイメージアップしていく、ということをやりました。

大体「絵」ができたら、「あなたが会社から帰ってきて寝るまでの物語をつくってください」ということで、「○○さんがテラスでビールを飲んでいたので一緒に飲んでいる」というような「自分がこうしたらいいな」ということを書いてもらい、いろいろな人の意見を出し合いました。それと、家賃などのデータをこちらが出して、皆さんが具体的に自分が払うお金として考えるという情報提供もしました。

あとは、人間関係のつくり方、距離感をどうつくっていくか。やはり、たくさんの話し合いをしていく中で、個々の人の大切にしているものもそれぞれ違うということや、男女、年代でも違う、そういう話し合いをいろいろなテーマで繰り返すことで、人と自分の距離感をつかんでいくようなことをワークショップを通してやっていきました。「相手を知ると思って始めたけれども結局自分を知るということになった」という感想もありました。

また、日本人はどこでもディベートの訓練をしていないので話し合い方を知らない。口うるさくいろいろなことを言うのはとても品

が悪いと思っているところもあって「まあ我慢していればいいわ」となってしまう。ところが、自分の意見をちゃんと出して、相手もちゃんと出して二つ並べてみて話し合う、ということをしないと、気持ちのいい解決法にはならない、ということをいろんなことをやりながら学んでいってもらいました。どうしてもたくさんの人で会合をすると声が大きい人だけ発言してしまうので、そうしないために私たちのNPOはワークショップ方式をずっと使ってきています。ワークショップ方式というのは多民族国家であるアメリカで開発された方法論で、言葉が通じないので札を上げてみたり、黙っていても意思表示する方法などいろいろなやり方があります。

入居者同士の距離感について一つの例をお話しますと、かんかん森の玄関はオートロックで、インターホンが鳴るのは各住戸だけなんです。すると、誰かをお客さんが訪ねてきてその人が不在の場合、折角来てくれてもダイニングルームや共有スペースにはインターホンがないため応対してあげられないので、「共有スペースにもインターホンが鳴るようにして欲しい」と言った人がいました。私たちは「それはおかしい。共有スペースは庭みたいなところなで、インターホンは鳴らなくてもいい」と言いました。親切心から誰かのお客さんをとても可哀想だと思ったとしても、「もしその人が会いたくなかった人だったらあなたはどうするの？」という距離感です。個は個として自分の世界があるという距離感をどうやって保っていくかは、その都度私たちが客観的な人として話をするというような役割で、入居後も当面1年間くらいは必要かなと思っています。他人の荷物が受け取れなくてもその人の問題で、代わりに受け取ってあげようとは思わなくてもいい。廊下にもインターホンがあって、しょっちゅう出て行かなければならないとしたら、施設のようなものになってしまう。「住まいと施設の差」というのが経験としてないものだから難しいわけで、私たちも入居してみて初めて「こういうことも起こるのか」ということもあります。その辺はずっとやっていかなければわからないと思いますし、そういうコーディネートも含めて、当面やっていきます。

入居者の選定方法は？

今井　日本労働者協同組合連合会で機関紙をつくっている今井です。入居者の選定方法を教えてください。誰でもいいというわけではないですよね？

宮前　全然敷居がありません。退去者が出た後に、新しく誰か入居希望者があった場合、その人が「入っていい人」かどうかをどうやって選ぶのか、という質問がよくありますが、誰も選びません。選ぶのは「入る人」です。入居者が皆「私たちはこういう人です」と表示して、来た人は「ふぅん、こういう人か、こういう人なら仲間になってもいいな」と思えば入ってください、「こんな人はイヤだ」と思ったら帰ってください、というだけで、逆に「あなたは私たちに合わないから選びません」ということは一切しない、ということを皆さんとも話します。

「担う」というのは本人の問題なんです。だからその人が本当に担いたいと思って入っていないと、やはり作業に参加できなくなってしまいます。最終的にどんなにフィルターをかけても、自分がやりたいと思っていないと、こちらが選んだ人が「いい人」にはどうもならない。すでにあるチームができてしまっているのだから、「こんな人に入ってもらっては困る」と誰でも思うわけですが、ところがその基

準で選んだ人が決してよかったとは限らない、ということをスウェーデンでも皆さんおっしゃっていました。「このやり方に私も一緒に混ざりたい！」と入ってくれれば大丈夫だけれども、こちらから選んだ場合は失敗することが多い。だからそこはオープンにしてしまって、「自分の意志で決めて入ってきたのに、どうしてルールを守らないの？」と言うわけです。

ただ、それが通用するのは、どうやらある程度の人数を超えた場合みたいですね。10人以下になってくると、前からいる人たちが入ってくる人をどうしても選びたくなります。少人数の場合は「誰でもどうぞ」というだけの力がないんです。ところが30人くらいいると「誰でもどうぞ」と言えるんですね。そこは人数に問題がありそうで、私たちがコレクティブハウスを「30戸くらいがいいんじゃないか」と言っているのは、だいたい50人弱の人がいるという想定なんですね。かんかん森でも満室の想定で28戸で40人弱くらいです。30～50人くらいの人がいると、外から1人くらい新しい人が来ても、何となく皆でやり取りしていける。だけど10人以下だと、入ってくる人にかなり左右されてしまう。だから選びたいという気持ちが強くなってしまうんです。

一人暮らしが多いのか？

横田　協同総研の横田です。私の想像以上にワンルームの割合が多いですね。28戸中15戸がワンルームということですが、スウェーデンのコレクティブでも独居老人や若い人の一人暮らしが多いということですか？

宮前　そうですね。向こうは18歳になると皆家を出てしまいますので、若いシングルも多いですし高齢者のシングルも多い。ただ、あちらは一人当たりの住戸面積の最低基準が決まっていまして、それを下回ったところに住むと法律違反のため、もっとリッチなところに住んでいてワンルーム形式ではありません。私たちがこれを採用したのは、多世代ということを考えたのと、家賃幅を広くするということもあったんですが、もっとシンプルに暮らすことを考えたらどうか、ということでした。

共同のスペースを持つということで、自分の住戸は「私の居場所」としてできるだけシンプルにしてしまうということがあって、同じワンルームでも40㎡の部屋もあるんですね。普通だと2DKくらいとれますのですごく気持ちいいです。ゴチャゴチャとした間仕切りはしない。ですから小さいからワンルームというわけではなく、住まいの仕組みとして自分で家具でもパーテーションでも好きなもので間仕切ってください、という発想です。できるだけ「私の空間」を広く取って、設備を固めてしまって、ということです。40㎡のワンルームは今、3歳の坊やと夫婦で住んでいます。

横田　資料に「同居者募集」という青年がいますが？

宮前　3階にはドアが2つある家があるんですが、シェア・ルーム用につくったんです。もちろん夫婦でもそれぞれ違うドアから出ていただいてもいいと思うのですが(笑)。この部屋は真中にキッチンとダイニングスペースがあって、風呂もあるんですが、個々の居室は完全に分かれていてドアも別です。その青年はその部屋に住むことを希望していて、なかなか同居人が見つからなかったのですが、先日60歳のご婦人とお会いになって2人で住むことになりました。全く知らない人と住むわけ

ですが、とても気が合って「よさそうじゃない」という話になっています(笑)。

先ほどの3歳の坊やはコモン・ルームを駆けまわっていると、いろんなおじいさんやおばあさんが面倒を見て、よその家でごはんを食べさせてもらったりしていますし、本当に血縁じゃない家族というものもできています。

ちなみに今の入居者の年齢構成は、3歳が一番小さく78歳が一番上です。シングルは20代から70代まで、女性の方が多いですが、いろいろなシングルがいます。2人暮らしは、リタイアカップルもいれば新婚さんもいるし、先ほど言ったような全く他人のシェア、それから高校生の娘と母親、50代の子と70代の介護の必要な親とか、いろいろな2人がいます。日本の世帯構成は4人家族というのはもう30%を割ってしまっていて、標準世帯でもなくなってしまっているのですが、かんかん森の世帯構成も日本の縮図のようになっています。

横田　スウェーデンでもかんかん森のような賃貸方式が一般的なんですか？

賃貸方式と居住権分譲があります。居住権分譲では権利は売買できますが、月々の家賃は賃貸とあまり変わらない額を払わなければなりません。日本のように金利も払うローンで取得するのが得かどうかはよくわかりませんが、どちらも同じような家賃であっても、物は老朽化してしまうが権利は変わらないという意味で進んでいます。居住権を勝手に売買して吊り上げるようなことは抑えられているのですが、最近スウェーデンも少しバブリーな様相がでてきて、居住権を高く売りたい人たちも出てきているようです。

ワークショップという手法

古谷　去年の千葉の協同集会で「住まいと協同」の分科会でコーディネーターをしました

古谷です。その時の感想は「これは働く協同よりもっと大変だ」ということでした。先日かんかん森の見学会に行ったのですが、2階のコモン・ルームの真中に立つと、6月の非常にうっとうしい曇りの日にもかかわらず、えらい風が通るんですよ。ちょっと扉を開けると東西南北に通じているんです。それがすごく印象的でした。

神戸の被災後のコレクティブのスライドを見せてもらったことがあるのですが、あれはもう少し長屋風の感じがします。廊下を歩くと住んでいる人の文化なんでしょうけれども、戸を閉めずに簾が掛かっているような住まい方なんですね。外からも内からもチラッと見える、という感じがあります。だからあれは長屋の延長かなという気がしました。

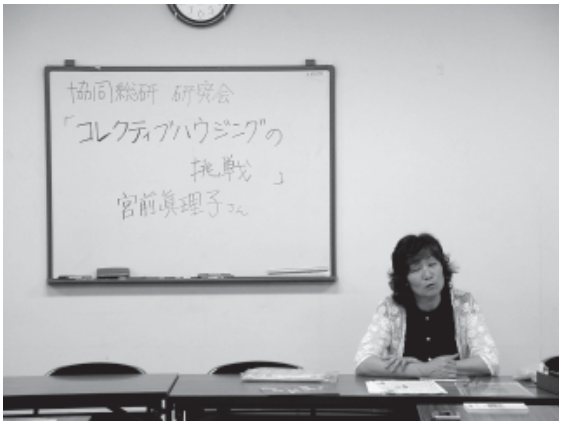
この間もお話を伺ったのですが、かんかん森では入居者が埋まるまでの間にワークショップを30回ほどやったとのことです。1回に4時間半くらいやるそうで、準備と後片付けを入れるとものすごい時間をワークショップに費やしている。我々はこのワークショップというやり方をはっきり意識をして働く者の協同に使っていなかったんですが、失業者を対象としたヘルパー講座などで、協同労働で新しい事業を起こそうとするプロセスで、いろいろな手段を講ずる中で、背中をドンと押すだけでなく、ワークショップやロールプレイを取り入れたら面白いのではないかと思いました。延藤安弘先生の書いた本の中に、協同で暮らすためのプロセスとして3段階あって、1段階目が気持ちづくりのワークショップ、2段階目は形づくり、物理的な設計ですね、そして3段階目に仕組みづくりでご飯を週何回一緒に食べるか、掃除はどうするかといったことだそうです。いろいろと手法が開発さ

れつつある最中なんだろうな、という感じもしています。多分、孤立して生きてきた人間には協同で何かをするということはなかなか難問なんで、その辺の手法の交換をやったらいいかもしれない、と思いました。

宮前　ワークショップをやる価値や魅力というのは、特に建築などの分野に限らず、そこに来た人たちのパワーの中で皆が新しい何かを見出すことを手伝うというか円滑にやり取りしていってもらう方法論なんで、何でもワークショップ化できます。もちろんモノによってはきちんとした情報を勉強しなければなりませんが。先ほど言ったように「自分に気付く」ということと「他人に気付く」ということは本当に合わせ鏡のようになっているということで、「今日も何かひとつ私のことがわかった」ということを持って帰ってもらえたら、もうそれで1段階合格という感じだと思います。

横田　古谷さんのお話の中に「長屋」ということがキーワードとして出ていましたが、宮前さんやメンバーの方々はかんかん森の構想や実際の活動に「長屋」というイメージを重きを置いているのでしょうか？

宮前　「長屋」には全く重きを置いていません。個というものがちゃんと確立されないと



協同ということはできない。だから、長屋と言われると、何となく皆混ざってしまうようなイメージが日本にはあるので、長屋という言葉は極力使っていない。逆にむしろもう少し自分のスペースをきちんと確立することというのを先に話をしています。コレクティブのものすごくいいところは、自分のスペースが確立していること、それと共同の場所があることです。それで、維持管理も自分たちでするのでソフトも自分たちが持っています。場所とソフトを両方持っている、そこを両輪のようにしていくというのがコレクティブの素晴らしい仕組みだと思っています。

普通のマンションだと思いがあると誰かの家で共同で夕飯作りをしましょうとか、子育てサークルをやりましょうということになるんですが、場所が欠乏している。「集会室を用意しました」というマンションも最近はありますが、それは皆さんが自由に使えない管理された場所なんです。その場所は自主管理できないので生きないんですよね。ハードあってもソフトなし、ソフトあってもハードなし、ということでこの2つで日本では上手くいっていないことが多いように思います。

コレクティブは、やはりスペースを自分たちで持ちソフトも自分たちで持つ。自分たちで運営するのだから大変なんです。だけど暮らすということはもともと自分で運営するものなので、何か珍しいことをやっているわけではない。ただその時に「個の空間」が安定していないと協同は上手くいかない。帰るところが安定していないとヒステリーが起こってしまうんです。だからその2つがきっちり空間設計にも出ていて、善意で他人に踏み込んではいけないというような仕組みとしてもできている、ということでないと。誰かの家に行かないとその人と話ができないということになると、常にその人の家はプライバシーとしては侵害されていくわけですが、「コモン・ルー

ムで話そう」ということになれば、家が汚かろうが誰かが来ていようが、ちゃんと話ができる。そしてそのスペースは広々としているのでやっぱり気持ちがいいんですね。

それから、少しずつ力を出し合うということで言うと、コモン・ルームがいつもきれいであったり、テラスで皆で水やりをしていつもきれいに花が咲いていたり、少しずつ重ねていくことで豊かさを生むことを実感するんです。だから、ソフトとハードの両輪がきれいに回っていけばものすごくいい仕組みだと思っています。

普通の勤め人でも参加できるか？

杉本　関西大学の杉本です。私は協同組合の勉強をしていますので、コーポラティブハウジング(協同組合住宅)といった分譲の方の協同の住まいづくりはそれなりに聞いたことがあったのですが、賃貸でこういうものをやっているという発想すらなかったものですから、非常に新鮮でいい勉強をさせていただきました。

私が自分でこれに入ったらどうなるのかなと思って聞いていたんですが、外国であればコモン・ミールというのが上手く成り立つと思うんですね。だいたい仕事がそれなりの時間に終わるでしょうし、どうせ家で食事をするのだから週のうち何回かは協同でやろうと。で、スライドで見せて頂いたように、長々と夜遅くまでダベッているのではなく、さっと切り上げる、非常にいいと思います。ただ、5週間で2回だけ5時に帰ってきて食事の支度をしろと言われればまあ「やろうと思えばできる」と思うんですが、多くの勤め人にとってそれが限度だと思うんです。あるいはジェンダーバイアスがかかった事を言えば、主婦なら苦もなくできるかもしれませんが普通の男にとっては苦役に等しいんではないか(笑)。普段はここで食事をたべられないケースだって普通の勤め人には多いと思います。そう考えますと、何かコモン・ミール以外に日本の実情にあったような協同のキーワードになるようなものはあるのかなと思います。

もちろん、社会が間違っているとは思いますよ(笑)。ちゃんと帰ってくる社会をつくらなければいけないとは思いますが、現状ではそうなっていない中で、シングルでも女性の方が参加者が多いということですが、普通の勤め人でも喜んで参加できるような、コレクティブハウスをつくっていく中で、コモン・ミール以外で何か今後キーになってくるものはあるのでしょうか？

宮前　「食べること」は毎日の暮らしに絶対欠かさないことです。それ以外のことだと趣味を共同化するみたいな形もあるとは思います。一人じゃ持てないようなオーディオルームとかを共同化することや、コーポラティブのように共同して家を所有してしまうこともあります。ただ、私たちは、あまりにも「モノ」に制圧されてしまう日本の今の暮らし方や、特に「家の所有＝資産」ということでモノの所有に力がいってしまうところを見直して、暮らしそのものをもう少し集中的に見られるようにするには賃貸にしておいた方がいいと考えています。

そして暮らしそのものに視点を置こうとすると、「食べる」ということは外しにくいだろうと思います。それから「暮らしをどうにかしたい」と思っている人たちは、今の暮らしがイヤだと思っているわけだから、少しの力、例えば5週に2回帰ってくるだけで、あとは9時ごろに帰ってきたりしても皆がまだ食べていた

り、コンビニの弁当とは違うものが食べられる、ということを望んでいる。だから「変えたい」という気持ちの中で、こういうものが受け入れられているのかなと思うんですよ。今、経済はこれが正常なのかもしれませんが右肩上がりではなくなっています。やはりこれから時間がもっと増え、逆に収入は減るかも知れません。その時に「暮らし」というものはものすごく大切なものになるだろうと思います。それも家族だけのといった小さなものではなくて、もう少し広がった暮らしがあった方が気持ちがいいだろうということを思うと、男の方にこそ多分こういうことがあったら、少しのことで変えられる可能性が高いのではないかと思います(笑)。料理の腕前はかんかん森でも本当に千差万別です。皮むきしかできないおじさんから口うるさいおばさんまでいろいろいますが、各種大体実力がそろうくらいのチーム編成を住民がしたんですね。それと勤務体制が遅い人ばかり集めたりすると大変になってしまうので、リタイアの人などいろいろな人がいるというのはすごくいいことで、買い物をその人ができるとか、時間も融通し合っている。遅く帰ると片付けのラインもあるんですよ。自分ができる部分をもう少し増やすことで暮らしに参加していく機会を広げる、ということは暮らしを微妙に変えていく力になるんですね(笑)。1人で7時に帰ってきて1人で料理をつくっても何も楽しくないと思うんですが、やはり食べる人がいたりするとすれば、5週に2回帰ってもいいかと思えるかも知れない。だからその辺は協同することで逆に原動力をもらうという可能性を持っていると思ってやっています。

横田　コモン・ミールはだいたい夕食なんですか？

宮前　そうですね。朝食でやっているところもありますが、夕食が多いですね。子育てをしていて働いていると、どうしても帰ってからの夕飯づくりは忙しくて大変だということもあって、そこのところが週何日か共同で食べられると、親も子どももゆったりしていますよね。帰ってからのサイクルを少し変えられる。やはり夕飯を共同にすることで暮らし全体のゆとりや豊かさが生まれてくるのではないかと思います。

古谷　変な連想ですが、チンパンジーの世界ではメスはコレクティブに生きているわけですが、オスは半径50kmに離れて住んでいる(笑)。女性はこうした生き方暮らし方にスッと入れるわけだから･･･。

宮前　そうでもないですよ。男性でもスッと入れる人はいる。世代によってだいぶ変わっていますね。シングルの人は意外と変わっていなくて「昔ながらの男」みたいな人もいますが、カップルになっている男性はよく参加しますよね。だから、違和感なくコレクティブハウスにも参加します。

「世帯」という発想が、かんかん森で話し合っているうちにだんだんなくなったんですよ。「個」なんですね。「女房が行ったから私はいいんです」というということは全くなくて、60歳になってリタイアしたお父さんは、皮しかむけないのだけれども、奥さんとは違うチームで褒められて喜んでいる。やはり、自分の能力開発も出来上がった関係の中ではそれ以上進まないのだけれども、別の関係性の中

では新しい可能性が見えてくる。自分の知らない能力ってたくさんあるんだと思うんですね。よその人のやっていることに触発されることで、知らなかった世界に触れる、といったところも多世代で男女も混ざっていて面白いところなんではないでしょうか。

でも参加する方はチャレンジャーであることは確かだと思います。誰彼にも合う住まいとは思いませんし、どうしてもイヤだという人の方が多いと思います。これをすんなりやっていくのは1～2%じゃないでしょうか？

だから人生のある時期、例えば子育て期にこういう協同の暮らしを選び、子どもが大きくなったら普通の家に移るという暮らし方もあります。選択肢の一つとしてこういう暮らし方が日本でも選べたらずいぶん豊かなものになるのではないかと思います。

菊地　時間となりましたので、以上で終わりにします。私は個人的に思い入れがあって、去年の今頃初めてお話をうかがって、かんかん森が募集中ということで「入りたい」と思ったのですが家庭的な事情であきらめました。こういう住まい方は実は私が一番望んでいたものですが、まだ日本に一つしかないということで、これから宮前さんたちがいろいろなコレクティブをつくっていくという活動をするということをおっしゃっていて、まさに暮らしの場から社会の一部を変えていくということにかなり真剣に考えて取り組んでおられるということに共感をしたということです。何人かの方からのご意見にもありましたが、実際に住んでいる方のお話を聞きたいということもありまして、しかるべき時期に第2弾として、居住者の方も交えた研究会を行いたいということでご相談させていただいています。その機会にはぜひご参加ください。本当に今日は長い時間ありがとうございました。

（紙面の都合上、一部の質疑を割愛させていただきました。　　編集部）